

あごろ

い

の

ち

を

見

守

る

夫殺しの事件から

■へあごろくに出逢つて二十年——高橋ますみ

■へ矢神さんを見守る会結成にあたつて

■見守る会からのメッセージ——たちふみこ／岡久美子

■公判を傍聴して——斎藤まこと／西川けい子／門玲子／

吉川富士子／重原惇子／宇佐美登司子

■いのちのルネッサンス——坂下悦子

■病身にならないうちに考えたいこと——中根洋子

■安心して老いるために——堀久美子

■乳ガンの手術を体験して——下村美恵子



〈あごら〉に出逢って二十年

高橋ますみ

一九七二年、女性の生き方を考える雑誌、〈あごら〉が創刊されたとき、私は三十四歳の転勤族の主婦でした。その当時、一冊の薄っぺらな雑誌との出逢いが、私の人生をどんどん拡げていくことは夢にも思いませんでした。

〈あごら〉で、私がうまくことば化しえない悶々とした想いが、表現され議論されているのは新鮮な驚きでした。私はどうも、孤立化した変わり者ではなさそうだ！

それから、名古屋の地で〈あごら東海〉結成の呼びかけ、その後東海BOCの設立、十二年間の継続と終結を通して多くの出逢いと、学びを体験しました。

このたび、この二十年のつながりと拡がりをもとにしたネットワークを基盤に「ウイン女性企画」(Women's International Network of Neighborhoodの略)をスタートさせることができました。

女性の能力を育てよう創造力の銀行BOCと、女性のかかえるあらゆる問題を思考し、行動へと向かう〈あごら〉の活動を両立させていきたいと願っています。

斎藤千代さんの湾岸戦争についての講演会を皮切りに、北山郁子医師を招いての「家庭内性教育」のシンポジウム、「自立の、夢をかたちに」をテーマにしたパネルディスカッションと、企画を実現してきました。またマイノリティとしてまだ市民権を充分には得ていない人間関係についても考えてみよう、ゲイの立場から著書を出された伏見憲明さんを東京から招いてトークライブをと、いずれも名古屋市の女性ホールで開催しました。

これらの企画のアイディアと実現の活力は、毎週火曜日午後の「スペース・ウイン」での、テーマを決めないトークタイムから生まれています。

今回特集させていただく「いのちを見守る」は、名古屋市内で昨秋起こった看病をしていた妻による「夫殺し」の事件に、自分たちにも起こりうると〈見守る会〉の結成に参加したのがきっかけです。

目次

巻頭言 〈あこら〉に出逢って二十年 高橋ますみ 1

〈矢神さんを見守る会〉結成にあたって 4

〈見守る会〉からのメッセージ

第一回集会報告 たち ふみこ 8

第二第三の矢神さんを出さぬために 岡 久美子 9

公判を傍聴して

障害を持つ者から 斎藤まこと 11

涙を流すだけでなく 西川けい子 12

夫婦間の結びつきの強さが…… 門 玲子 14

夫を巻き込んで 吉川富士子 16

傍聴初体験 重原惇子 20

M子さんへの手紙 宇佐美登司子 21

新聞に見る矢神さん事件 23

いのちのルネッサンス 坂下悦子 27

病身にならないうちに考えたいこと 中根洋子 32

乳ガンの手術を体験して 下村美恵子 39

めじゃーなりすとのめ 安心して老いるために 堀 久美子 48

あごらメイト ハー！ ヒー！ フー！ ヘー！ ホー！ 中根洋子さん 50

あごら読書室 52

あごらのあごら 54

編集後記 56

〈矢神さんを見守る会〉結成にあたって

平成三年十月二十三日、名古屋市北区在住の主婦矢神M子さん（五十二歳）が、脳梗塞のため右半身不随・全失語症となった夫のTさん（五十八歳）に頼まれて絞殺するという痛ましい事件が起きました。

M子さんは昭和五十年四月十一日にTさんと結婚。Tさんには当時十歳の長男K君と九歳の次男I君があり、前妻のKさんを病気で亡くし男手一つで二人の子を育てていました。

結婚後M子さんは二人の子を育てあげ、夫Tさんの仕事（印刷業）を手伝うなど、つましい生活ながら近所の人も羨むほど仲のよい夫婦・親子関係を築いてきました。Tさんは自宅の一室を改造した工場で、葉書や伝票の印刷の仕事を一人でしていました。真面目で仕事熱心な上に子煩悩で、M子さんに対しても思いやり深い優しい夫でした。

これまでに病氣らしい病氣をしたことのなかったTさんの身体に異変が生じたのは、今年の四月二十一日のことでした。

翌四月二十二日、医師から脳梗塞と診断され即日入院したTさんは、以後半年余り入院生活を送ることとなりました。その間M子さんは医師から再三休養をとるよ

うに勧められるほど献身的な看病を続けました。

Tさんは十月十日に退院しました。完全マヒ状態であった右半身のうち、下肢の機能が若干改善され、ベッドから立ち上がったたり補助具を使って少し歩けるようになりましたが、それ以上に回復する見通しはありませんでした。

とりわけ完全失語の症状はほとんど改善されず、自分の気持ちを言葉で表したり会話することは不可能で、Tさん自身もかなり落胆していました。

他人に面倒をみてもらうことを極度に嫌う性格であったTさんは、退院後家族に世話をかけることを非常に負担に思い、また病状の改善がみられないことから次第に悲観的になっていきました。

そんなTさんをM子さんは精いっぱい力づけ励ましていたのですが、Tさんから泣きながら死なせて欲しいと繰り返し訴えられ、とうとう拒みきれずTさんを絞殺してしまいました。

退院後十三日目の十月二十三日のことでした。

当初M子さんは殺人の容疑で逮捕され、取り調べを受けていましたが、本年十一月十三日、嘱託殺人罪で起訴されました。

私たちはこの事件を通じて、実に多くのことを考えさせられました。

高齢化社会において他人の手を借りることなく生を全うすることは、ほとんど不可能に等しい現実を知らながらも、他人の手を煩わせることなく生涯を閉じたいと

いう願望は依然根強いものがあります。そして残念なことに、目下のところ私たちは、こうした願望と現実とのギャップを解消すべき有効な方策を持ち合わせているとは言いがたい状況にあります。

生産性と効率性を追い求め続けた結果、私たちはいわゆる「豊かな社会」を享受することができずに至ったといわれています。しかしながら、この「豊かな社会」は、生産力や労働力を失った人にとっては、不安と絶望に満ちた社会でもあります。病に倒れたTさんが、自分自身の中に、一人の人間としての存在価値を見出すことができなくなってしまったことの背景には、現代社会の抱えるさまざまな問題が凝縮されていると言っても過言ではありません。

この事件はまた、私たち一人ひとりに対して、夫婦や家族の在り方そのものを、根本的に問いかけるものでもあります。

M子さんは半年余りの間、夫のTさんを力づけ励まし、献身的な看病を続けてきました。

M子さんのTさんに対する献身的な介護は、周囲の誰もが高く評価していました。M子さん自身も夫を助け、支えることを、妻として当然のことと受けとめていました。Tさんもまた、自分の苦しみや悩みをM子さん以外の人に訴えようとはしませんでした。Tさんの苦しみや悩みは、次第にM子さんの苦しみとなり悩みとなっていきました。

Tさんにとって自己の死を託せるのは妻であるM子さんだけであり、その胸中を知ったM子さんが心ならずもその役割を引き受けてしまったことは、誠に痛ましい限りです。

私たちはM子さんの行為をいたずらに正当化しようとするものではありません。ただM子さんの置かれた状況が、決して特異なものでもなければ自分と無縁なものでもないという、共通の認識を持っているにすぎません。

M子さんの行為に対して、「妻としての責務を放棄したもの」という厳しい評価のあることも、よく承知しております。他に選択すべき途がなかったのかというご意見も数多く寄せられています。

私たちはこの問いかけこそ、いま私たち自身に向けられたものと受けとめています。

私たちは矢神M子さんを見守りつつ、この問いかけについて真摯な議論をしたいと考えています。

そして一人でも多くの方が、この議論に参加して下さることを望んでおります。

以上の趣旨をご確認いただき、本日〈矢神さんを見守る会〉を発足させたいと思います。

一九九一年十二月十三日

〈矢神さんを見守る会〉



〈見守る会〉からのメッセーシ

第一回集会報告

世話人 たち ふみこ

昨年十二月十三日（午前十時—十時四十分）。矢神M子さんの第一回公判が、名古屋地方裁判所九〇三号法廷で、約四十数名の見守るなか緊張と静寂のうちに終わりました。

この後刻、公判を傍聴した方々を中心に、名古屋弁護士会館で〈矢神さんを見守る会〉第一回集会を開き、〈見守る会〉（略称）を発足いたしました。

私たちは、この事件に対して、多くの方々からの評価、意見、問いかけをもとにして、これからの議論を深めていきたいと考えています。

同時に〈見守る会〉は、現代のいわゆる「豊かな社会」と対峙する社会的諸条件の背景について、その根元を明らかにできればと願っています。

したがって、私たちは〈見守る会〉の趣旨に添って、いくつかの課題を設定しつつ、みなさんと共に、現代社会の病巣を解明し、誰もが等しく生きがいのある生活を全うするための条件とは何かを、辛抱よく探っていきたいと思います。

とりあえずその一つに「誰もが生計を営むことの可能な社会的・公的条件整備」について、二つに「看護・介護における両性の意識改革の問題」、三つに「高齢化社会における諸課題」、をとりあげ、議論や学習を重ねるなかから、この三つの課題の相互関連を見出していくことを試みたいと考えます。

〈見守る会〉の活動としましては、公判の傍聴、学習

討論、ニュースの発行などを予定しています。第二回公判からは証人尋問もおこなわれます。公判傍聴により、現代社会の凝縮された事柄が浮き彫りにされ、私たちは、矢神M子さんの置かれた状況とは無縁ではないという実感を持つのではないかと思います。

学習と討論、ニュースを発行することにより、一人でも多くの方々が、この事件を通して、私たち自身の豊かな社会、平等に生きる社会に迫る第一歩にしたいものです。

〈見守る会〉の運営につきましては、第一回集会で確認いただいたように、会費制で賄っていきます。

(見守る会ニュース NO. 1)

連絡先 〒460名古屋市中区丸の内三ー六ー七

美濃金ビル三階

亀井法律事務所内

TEL・FAX: 052-962-5460

郵便振替: 名古屋 4-119037

〈矢神さんを見守る会〉

第二第三の矢神さんを

出さぬために

(フリーライター) 岡 久美子

この事件の背景に女性問題が存在していることは、既に多くの人々が指摘された。私も全く同意見である。そのことをふまえたうえで、さらに医療・保健・福祉の点から問題提起をしてみたいと思う。

一般に病院は、病気の治療改善と社会復帰のために医療システムが整えられている。矢神さんのように治療はなく、リハビリテーションのみ、それも余り練習効果のない患者は、その医療システムの中では取り残されがちであろう。

知人の看護婦が、「患者さんは検査漬け点滴漬け、ほったらかし。看護学校で抱いていた夢なんか、医療の現場では吹き飛ばされてしまう」と述懐している。三交替制の勤務は医師から指示された処置を超過勤務で消化するほど忙しく、慢性的な人手不足である。患

者へのcure（治療）が精いっぱい、とつちcare（看護）までは手が回らないそうだ。

右半身不随、全失語症という厳しい自分の状態を容して、再び生きる気力を取り戻すには、それなりの専門的知識を持つ人の援助と時間が必要である。

「頑張りなさい」という言葉だけの慰めではなく、不自由な身体で生きてゆくには、どのような福祉サービスが受けられるのか、そのためには、どこへ行ってどんな書類を出して手続きをするのか、など具体的にきめ細かな情報提供が欲しい。そしてそれは、介護に明け暮れて疲労困憊している家族にとつても実現可能なように行われなければならない。

欧米の場合、患者および家族と公的サービスなどの社会資本をつなぐ専門家として、スーパーバイザーが存在する。対象者の周囲には、スーパーバイザーのコーディネイトのもと、医師・看護婦・保健婦・リハビリ療法士・ホームヘルパー・ボランティアなどが必要に応じて派遣され、デイサービスやショートステイを併用しながら在宅看護で支えている。

日本ではさしずめ、メディカルソーシャルワーカー（MSW）がこれに当たるだろうか。しかしMSWのいる病院はまだ数が少なく、しかも彼らには資格がないので、事務職員として雇用されている場合が多い。

名古屋市には在宅療養支援事業があり、各区の保健所に申し出れば、月二回ほど訪問看護指導が受けられるが、人口二百十万人に対して保健婦はわずか百人ほど。在宅介護支援センターは一所所でホームヘルパーも約百人と、福祉サービスの量的・質的貧困が指摘されている。

病氣や障害を抱えて、家庭崩壊寸前の状態にある人の中から、第二第三の矢神夫婦を出さないためにも、早急な改善が必要だ。迷惑をかけてすみません、などと小さくなって生きるのではなく、憲法第二十五条に保障されているように「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有し」ているのであり「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障、及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」のだから。（見守る会ニュースNo. 2）



公判を傍聴して

障害を持つ者から

(前名古屋市議員) 斎藤まこと

私は複雑な気持ちで傍聴しました。公判後の集会で多くの女性が、「自分の問題として考えたい」と発言されていました。

障害者である私には、介護という問題は切っても切れないものです。障害を持つ者と持たない者が共に生きるという視点からは、その問題は、障害が「軽い」とか「重い」とかいうことは関係ないと思っています。だから「強い失語症だった」となぜ強調する必要がありますのかと引っかかったのです。

傍聴していて、ご「主人」はおそらく、介護について「世話になり申し訳ない」と思っていたんだろうなあと感じました。しかし、介護する側とされる側との間に、「申し訳ない」という気持ちが介在するとすれば、理屈だと言われるかもしれませんが、やはり、障害者やお年寄りが当たり前に生きることからだんだんと離れていくと思うのです。もちろん、今の日本の福祉施策が日本型福祉という名目の下、シワ寄せが家族に、そしてその大部分が女性にいく構造になっています。また福祉が、「……してあげる」ふうに理解されている場合が多いようです。このような社会的事実の延長線上に今回の「事件」があることは間違いありません。そのことは公判でも強く訴える必要があると思います。

しかし、今回の「事件」を「自分の問題として考え

たい」というのであれば、それに加えて、介護がないと自立して生きていけない障害者の存在にもぜひ思いをめぐらせてほしいのです。その視点はとても重要なことだと思うのです。

女性解放の取り組みの中で、「産む産まないは女の権利」と「障害者の存在」が議論されてきました。そして、その議論は、「障害者を生かさない社会は女を生かさない」という地平を獲得しているのですから。

涙を流すだけでなく

(編み物教室主宰)

西川けい子

名古屋地方裁判所九〇三号法廷。法廷に入るのははじめてだ。天井がずいぶん高いが、部屋は思ったよりずっと明るい。中央の前から二番目に座った。部屋の一番奥、手を合わせて祈るとき見上げる、そんな高さの位置に三つの大きな椅子がある。自分自身が無言の

裁きを受けている気がして緊張する。

傍聴席との間に木製の低い柵があるが、低いので向こうとこちらの境界を感じない。第二回公判では、傍聴を希望する人が多く席が足らなくなり、その柵を開けて椅子を貸しだす一幕があった。この公判に対する関心の高さはもちろんだが、その柵が開いたことで傍聴人と被告人の距離がまた縮まった。

やがて全員が席に着き、少し遅れて静かに公判が始まった。小柄なM子さんが入ってきて、さらに静寂が増す。ドラマのおおげさな演技しか見たことがないので、淡々として時間の流れが遅いように感じる。直ぐ前に座っているM子さんの背中からは、泣いているらしく時々小さく震えている。誠実そうな息子さんたちの証言が続く。永い十数年のことを一言で答えることができるとは思わないが、二人とも言葉を選び緊張しながらも立派に答えていた。

愛するかけがえのない人がいたからこそ起きた悲劇だろう。本当に愛する人の身になり、その人の望むようにした……。その二人の愛に育てられた青年たちの

証言もまた、両親を尊敬し力を合わせて誠実に生きて
いる様子がにじみでている。捕らえられることを承知
で愛する人の最期の依頼に応える、そんなにも愛せる
人がいる幸せが、重い病に倒れ生きる希望も失った人
の介護という厳しい壁の前に崩れてしまった。

証言する息子さんたちの気持ち、背中のおずかな
動きと、応えるまでの時間の長短で感じられる。両親
の性格を問われると、一言で言おうとするためか答え
が少し遅れる。言い足りないことが多いだろう。即ち
答えたことが二つあった。「お母さんに何かの処罰を
望みますか」に対しての「いいえ」と、「これからお
母さんと一緒に暮らしますか」に対しての「はい」の
返事は、はっきりと澄んだ声で即答だった。彼らの気
持ちがわかり、熱いものがこみあげてきた。

第一回公判の資料を読んだだけでは、愛ゆえの悲劇
としてばかりとらえていたが、公判が進むにつれて、
この事件がなぜ起こったのか、どうしたら起きなかっ
たのか考えることができるようになってきた。献身的
に介護するM子さんのぎりぎりの気持ちを支え助けな

がら、倒れた夫も生きる希望が持てる方法がなければ
ならないと思う。看護を一時替わってもらっても、山
ほどの用事を済ませるだけで自分は休めない経験は、
わたしにもある。「助けて」と正直に叫べないで、孤
独に自分を追いつめるほどに頑張ってしまう。「頑張
らなくてはいけないんだ」という声が内からも外から
も聞こえてくる。

人の手を借り、迷惑になるのが辛い。言葉を失って
も「すみません」という言葉は何度か言う。そんなに
頑張らなくても、そんなに謝らなくてもいいようにし
たい。

恥ずかしいことだが、社会に対する問題意識の低い
わたしは、公判傍聴に参加したことで、この事件に涙
を流すだけでなく、いろいろなことを自分たちのこと
として考えていかなくてもはならないと思うようになっ
た。

わたしにとっては何から学んだら良いのかわからな
いほど、わからないことばかりだが、一つ一つ考えて
いこうと思っている。

夫婦間の結びつきの強さが…

(女性史研究家) 門 玲子

一月二十九日、名古屋地裁で矢神M子さんの第二回公判を傍聴した。あまり寒い日ではなかったが、私は着ぶくれてスカーフや防寒ソックスまでバッグに入れていた。裁判所は暗く寒いところという思いこみがあった。

名古屋地裁の九〇三号法廷は、そんな私をとまどわせるほど明るく、こぎれいな小室で、眠くなるほど暖房がきいていた。ものわかりのよさそうな裁判長、亀井とも子弁護士がよく道理の通ったもの柔らかな質問、検事さえも語りかけるようにわかりやすく証人に質問する。ふと、これは法廷劇の一場面か、と錯覚したが、私の四人前の被告席に半白の髪を束ね、時折肩をふるわせて泣いているM子さんの小柄な後ろ姿を見て、現

実に引き戻された。これはまぎれもない実際の刑事裁判なのだ。

この日、証人席に立ったのは、M子さんの二人の息子さんである。二人の返答は、日頃の家族関係のなごやかさを感じさせた。しかし私が不審に思ったのは、兄弟とも自分たちの父親が死にたがっていたことを全く知らなかった、と明言したことだった。

今度の行為は、全く矢神さん夫婦二人の間で遂行されたのであり、この点は最後まで問題として残るであろう。もしこの事が事前に夫婦以外の人に知らされていたら、今度のような犯罪には至らなかったであろう、と思われた。

私は〈高齢化社会をよくする女性の会〉の古い会員なので、以前に寝たきり老人を介護する世帯の調査をしたことがある。大府市福祉課の職員とともに、①妻が夫を介護している、②夫が妻を介護している、③嫁が姑を介護している、三つの世帯を訪問した。

①と②の場合は、ともに夫婦間の結びつきの強さが、他人の介入を許さぬ雰囲気を持っていることを感じさ

せた。病人側に「この妻（夫）でなければ……」という強い期待と、介護側に「私でなければ……」という独占欲にも似た思い込みがあり、傍から見て少し息苦しくさえ感じた。

M子さんの場合も、この例のように夫婦間の結びつきの強さが推察されるが、更に他人に迷惑をかけたくないという律儀さが、他人に頼ることを拒んだあげくの重大な結果のように思われる。

M子さんは、夫が死にたがっていることを、車を運転する二人の息子に心配かけられないので話さなかったそうだ。これはまことに現代的な思いやりではあるが、結果の重大さとはつり合わない。たとえ息子たちに話せなくても、親類とか菩提寺の住職とか民生委員とか、しかるべき人に相談して、死にたがっている夫の心をときほぐし、明るいほうへ向けることはできなかったか、夫婦の結びつきの強さを閉鎖性に向かわせるのではなくて、他人に開放していくことはできなかったのか悔やまれる。

もちろん、他人に心を開くことは容易ではない。好

奇心や誤解にさらされる危険がある。けれども開き直って、別の道を発見するきっかけにはなるのである。他人には迷惑をかけたくないという矢神さん夫婦にしても、もし困っている人をみたら喜んでその世話をしたり、他人の支えになったりしたかもしれないのである。人間には必ずその両面があるのだ。他人に迷惑をかけぬ、という美德を疑う人はあまりいないけれど、この際検討する必要があるだろう。

M子さんの事件が私に教えたことは、年々老いていく自分の問題を、どれだけオープンに人に語れるかということであった。自分一人で悩まずに、共に考えてくれる人を求め、訴えていきたいと思う。

M子さんの今後を考える時、彼女が真の魂の平安を得るまでの長い道のりを思って、暗然とする。多くの人がM子さんを支え励ますだろうが、彼女自身がそれを受け入れる気持ちになってほしいと祈っている。



夫を巻き込んで

(フリーライター) 吉川富士子

私がこの事件を知ったのは新聞からで、その記事に母親が息子を電話で呼び、事件を説明した、とあった。冷静な人だなと思った。私だったら逃げ出しているのではないか。

友人からこの裁判を傍聴しないかと誘われた。彼女が、「夫は殺してもらって楽になったかもしれないが、残された妻がそのために裁判にかけられ罪を問われるなんて」と憤慨していたのに驚いた。そうだ、夫は妻の将来を何も考えていないのではないか。

私は夫にこの話をした。意外と夫は話を聞き、私が「裁判、一緒に行かない」と聞くと「いいよ」と言った。

私はもう一人、一緒にへおもちゃ図書館というボ

ランティアをしている一人暮らしの七十歳の友人を誘った。彼女は自分の母親を七年間介護して見送っていた。往診の医者に、「病氣(やまいけ)のないお母さんだから、百歳までも長生きしますよ」と言われ、素直に喜べなかったという経験を持っていた。

ちょうど一時半、九〇三号法廷に入った。友人が待っていてくれたが、席がなくなったので立ったままかもしれないと言われた。結局、椅子を増やし、それでも席が足りず、傍聴の学生が出されてしまい、申しわけなく思った。

そして私たちを待っていたかのように、裁判がすぐ始まった。審議の場はテレビでみるよりも狭く感じられ、傍聴席は広く感じられた。四十人はいたろうか。裁判官が、今日は二人の息子の証人喚問であると念を押し、嘘を言わないという宣誓をさせ、証人にルールを説明した。私には少々、証人を子ども扱いしているように聞こえた。傍聴席を気づかい、ていねいに行っているのだろうか。

二十七歳の長男から、弁護士の尋問が始まった。テ

レビで思い込んでいた尋問とは違っていた。弁護士は断定的でなく、ことばを選び証人が話しやすいようにしていた。淡々としたやりとりの中に、家族関係や病状、闘病の状態などがよく伝わってきた。

焦点は、息子たちが家に帰って母親からの「お父さんに頼まれて殺してしまった」ということばに疑いを抱いたかどうかということだったと思う。

「はい。父はちょっとしたことでもすまながっていたので、それで母に頼んだと思いました」と長男は答えている。

二十六歳の次男は、

「お父さんに頼まれてと言われた時、疑いを持ちませんでしたか？」

「はい」

「まったくありませんでしたか？」

「はい」

「どうしてお母さんのことばを信じたのですか？」

「半年近く父につきっきりで、よくやってくれたので、自分からやるとは思いませんでした」

また、長男への尋問の中に、

「お母さんへの処罰は？」

「いっさい望んでいません」

「あなたはお母さんと一緒に暮らしたいと言ったそうですね」

「はい、まちがいありません」とあった。

私は胸がつまってしまった。

裁判がすんで、Mさんが証人台のところまで身体にひもを巻き付けられているのを見て、怒りを感じた。こんなに観念している人を、なぜ人前で縛るのかと。

同じ時間と空間を共有したM子さん家族を私も「見守る会」の一員としてかわわっていると思う。もっと多くの仲間を作りながら。

■私から、傍聴した夫へのインタビュー

私 どうして裁判に行く気になったの。

夫 たまたま、そういうところに行く機会があったので。何でもよかった。そのあとすぐに、戸塚ヨットス

クールの裁判があった。人の出会いが偶然であったように、その裁判も偶然だった。

私 妻に誘われて行くのに抵抗なかった。

夫 別になかった。

私 実際の裁判の感想は。

夫 たいへん緊張した。終わった後に肩が凝った。

私 集会（矢神さんを見守る会）に出てどうだった。

夫 矢神さんと紙一重の人がいかに多いか、体験談を聞いてわかった。家族の信頼といがみ合いは紙一重。

私 矢神さんの息子さんについてどう思った。

夫 つらい立場だと思うが、兄弟助け合いながら、これは一時期、人生のひとつときにすぎないから、力を持ってやっていってほしい。

私 自分がもし同じ病気になったら。

夫 結局はその場にならんとわからんな。

私 だれに介護してもらうの。

夫 それはお前しかおらんな。

私 私、忙しかったらどうする。

夫 しょうがない。お前しかおらんから。子どもは子どもの世界があるだろう。

私 私が行っている生協のへくらしたすけあいの会の人たちは。

夫 それは関係ないだろ。

私 私我先に死んだらどうするの。

夫 どうするだろう。

私 じゃあ、私が同じ病気になったらどうする。

夫 やれるだけのことはやるだろ。具体的には言えんな。

私 じゃあ、私が苦しいから殺してって言ったらどうするの。

夫 望むならやってやるかもしれないなあ。そりゃ、思いついたら寂しくなるだろうけど。矢神さんは、きつと後悔しとらんだろうな。

私 でも裁判の後、自分は絶対、殺してくれって言わないって言ってたのに。

夫 はじめはそうだったが、だんだん変わってきた。私 どういうふうに変わってきたの？ やっぱり苦し

かったら殺してくれって言うの。

夫 わからんな、やっぱり。

私 これからの裁判は傍聴する？

夫 まあ、これからどうなっていくか、確かめたい気はあるな。

私 じゃあ、こんど二十六日、また行こうね。(夫はうなずいた)。

夫にインタビューをして、気持ちのずれがあるのに気がついた。まだまだ夫は保守的である。では自分はそんなに進歩的かといわれると、夫と五十歩百歩かもしれない。しかし、夫は次回も一緒に裁判の傍聴に行くと言っているので、二人で考え続けていきたいと思う。

次回は医師の証言なので、失語症という病気がどういうものなのか、よく知りたい。
(ウイン女性企画)



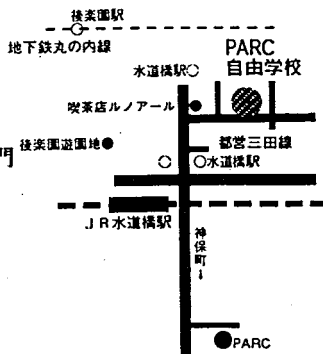
人と出会い、アジアと出会う。そして世界が見えてくる。

PARC自由学校 5月開校!

定員に達し次第締め切ります。申込はお早く(締切り4月20日)

92年度カリキュラム29コース決まる!!

- インドネシア語入門 ●タイ語入門
- Dialogues with the World: Ethnicity
- 開発ってなんだ? パート3
- 現実の仕組みが見えてくる 市民の世界経済入門
- 統合と分化のヨーロッパ
- アジアと日本を考える
- 一度やったらやめられない 調査研究入門
- 取材する・書く
- 市民派コンピュータ講座……etc.



〒113 東京都文京区本郷1-13-2 第2東野ビル2F
☎03-3816-0161

傍聴初体験

(ファッションライター) 重原惇子

何もかもが、私にとっては初めてだった。弁護士事務所に行ったこと、裁判を傍聴したこと。何より、殺人事件の発生から、そのいきさつに関心を持ち、成り行きを見守るといような経験は、普通の人にもそうそうあることではない。

高橋ますみさんの呼びかけに応じはしたものの、自分自身の関心は、本当はどこにあるのかも見きわめきれないでいるうちに、第二回目の公判を迎えた。

M子さんを支援する人たちがほとんどかと思っていたが、それにしても若い女性が多い。後で聞けば、三重大学、上野教授の生徒さんたちだったとか。法律学の実習としては、かなり中身の濃い裁判だ。彼女たち

の世代の意見も、ぜひ聞いてみたいと思う。

支援者たちは、裁判所という場所柄か、どの顔も緊張きみで、言葉少なだ。この事件に関心をもち、傍聴に来たアメリカ人のリサは、その静まりかえった法廷をととても奇妙に感じたらしい。裁判が日常的に行われる彼女の国では、法廷といえども、皆もっとリラックスしていると、本当に不思議そうだった。

最初の証人は、M子さんの息子。ということとは、被害者の長男でもあるKさん。亀井弁護士のゆっくりとていねいな質問に、彼は淡々と簡潔に答えていく。内容は、すでに私たちが事前に学習した内容とほぼ同じだった。彼女が引き出したと思ったとおり、彼は答えているようだ。かなりリハーサルを繰り返したのかと思ったが、公判後のお話では、打合せは一回だけだったとか。「どんなに綿密なシナリオを作っていくよりも、ありのままに答えていただくことが大事ですから」と、弁護士は彼らに言われたらしい。かなり緊張して、いつもの半分くらいしか話せなかったという

長男も、続いて証言台に立った次男のEさんも、その意味では本当に正直に答えていたのだろう。あのような場所で、演技のできるようなタイプの人たちではない。亀井弁護士との質問設定のうまさである。弁護士の腕とは、これを指しているのだ。

その二人に対する最後の質問は共通していた。

「あなたは、お母さんが何らかの刑を終えて自由になられたら、一緒に暮らしますか」

それまで、考え考え慎重に答えていたKさんが、この時は即座に答えた。

「はい、暮らします」

口数が少なく、肯定か否定かもなかなか表現しなかったEさんも、ためらうことなく大きな声で「はい」と言った。

この二人の後ろに座るM子さん、その後ろに居並ぶ私たち、演出されたドラマでもないのに、静かな声があちこちで流れた。涙があふれた理由は、二人の正直な飾らない心がそのまま私たちに伝わったからだ。義

理の間柄とはいえ、M子さんと二人の間には、この十数年の間にどんなにか暖かいつながりが育まれたことだろう。お父さんと四人の幸せな生活が目に見え、そんなにお互いを大切に思う人たちが、なぜ、今、こんな場所になければならないのか。ささやかな幸せを望んだ人たちが直面している悲劇を思うと、やり場のない怒りにいたたまれなくなる。

私が今できるのは、次回の公判にも出席して、静かにM子さんと息子さんたちを見守ることだけだ。

M子さんへの手紙

(主婦 埼玉県在住) 宇佐美登司子

M子さん

東京には珍しく大雪が降りました。

この寒さの中で裁きの日を待たれているお気持ちを

察しますと、本当に胸が痛みます。法廷で初めてお会いしたあなたに、遙かな年齢を感じ驚きましたが、きっと今日までの苦渋に満ちた月日がそうさせてしまったのでしょうか。今はゴルゴダの丘に上っていくキリストのように、大きな十字架を背負って、埋めようのない心の傷穴を見つめていらっしゃるのでしょうか。

あなたがこのような苛酷な行為に走らなければならなかった背景に何が存在するのか、私は今真剣に考えています。

社会的に多くは弱者に置かれる女性の立場、歪んだ日本の底辺の部分で解決されていない事柄はあまりにも多いのです。

今、私たち女性がしなくてはならない課題は、女が本来の意味で自らの主体を持って、堂々と生きることが出来る社会を構築することだと思っています。

生命の尊厳という意味からいえば、あなたの行為は絶対に許されるべきものではありませんが、事の裏に隠されている真実をとらえ、私たちは連帯して世の中

の虚構を暴かねばならないと思っています。

刑を終えられましたら、あなたのなさることは、過去にこだわらず、将来を恐れず、二人の息子さんと強く生きて下さることだと思っています。

第二回公判の法廷で、弁護士さんの「出所されたら、お母さんとまた一緒に住みますか」という問いに、証言台の息子さんは「はい、また一緒に住みます」と自信に満ちた返事をされましたね。血の繋がりのない二人の息子さんのこの返事ほど、あなたにとって愛に溢れた言葉はなかったのではないのでしょうか。これからの人生の残りの道程は、周囲の偏見やご自身の心の葛藤で並大抵ではないことと思いますが、この息子さんたちの愛情あふれる一言の重みを大切になさって、少しでも心穏やかな団らんの日を、一日も早く迎えられるよう、心から祈念してやみません。

一九九二年二月三日

寝たきりの夫 に「看病疲れ」

北区で妻が絞殺

二十三日午後二時五十分

ごろ、名古屋市北区内の無

職、Aさん(五八)の長男(三

〇番)が自宅で父親の

首を絞めて殺した」と一

では、Aさんは玄関わき六

畳間の布団の中で死亡して

おり、妻が「看病に疲れた

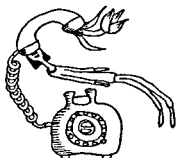
し、容体も良くならずかわ

いそうと思い、首を絞め

た」と供述しており、同署

91年10月24日『毎日新聞』

は妻を殺人の疑いで緊急逮捕した。
Aさんは今年四月に脳こ
うそで倒れ、寝たきりに
近い状態だったという。



年末に高橋すみさんと会った。高橋さんは専業主婦として子育てや老人介護を経験した中で女性問題に関心を抱き、女性の社会的自立の立場から行動し、発言を続けておられる。私の所属する学部の女性論や公關講座などの講師も引き受けていただいている。高橋さんと会ったきっかけは同僚の紹介による。ある事件の相談であっ



た。事件とは妻による夫殺しである。平穏な結婚生活を営んでいた夫婦にあって、突然夫が倒れ、半身不随となり、度々痛みを訴えていた。妻は献身的に看病をしていたが、ある日夫の求めに応じて絞首した事件であった。(本紙昨年十月二十四日)
この事件は二つの意味で特異である。一つは妻が夫を殺したことの意味である。もちろん殺人はいかなる事情

三重大学文学部教授 上野 達彦

寝たきり看病の悲劇

があっても許されるものではない。しかし、従来の結婚観・家族倫理は妻に対する過度な要求とその犠牲の上に成り立っていたことから、この種の事件において妻への風当たりは相当強い。この場合、本人には法的制裁よりも、こうした社会的制裁の方がよりこたえる。もうそろそろ妻が、夫がといった見方を変えなければならぬと思う。今一つは、この事件の場合のように家族のなかに寝たきりの病人が出た場合の看護のあり方についてである。超高齢化社会を迎え、老人の介護をどうするかはもちろん重要であるが、この事件の夫のように忙しさを感ぜながらもまじめに働き、生活にゆとりを持たないうちに疲労が蓄積し、寝たきりになった場合、家族の心労は極限に達する。
人の行動を良い、悪いと評論することは簡単である。しかし「人間の本当の優しさは暇さを伴うもの」という高橋さんの言葉を共有したい。いま高橋さんを中心にこの事件を「見守る会」が作られた。

あんぐる

92年1月25日『毎日新聞』

取材帳

言い切った。

会の世話人代表の館員美子さんは「夫が生きて、希望をなくした背景には、

脳こうそくで半身不随となり失語症に陥った夫を、

生産性だけを重視する現代社会の問題点がある」と指摘。夫婦間の犯罪を研究している三重大学文学部の上

人事件が、昨年十月名古屋市内であった。夫は、首を絞め口をささぐへさをして両手を合わせ、妻に「殺してくれ」と頼んだという。「事件を通して夫婦のあり方、介護の問題を考え

野達彦教授も傍聴に参加「妻の犠牲のうえに成り立っている従来の夫婦のあり方を見直す時がきた」と述べた。

「見守る会」は妻を弁護している亀井とも子弁護士

の知人が中心になって昨年十二月、名古屋地裁で開かれた初公判時に発足した。会

は我慢や辛抱が足りなかったと見られがち。でも彼女には精神的な支えをする人がいなかった」という。

長男は公判で「看病のかなりの部分を母に頼っていた。自分は、父が死にたがっていることにも気づかなかった」と証言。また「母

「事件を通して夫婦のあり方、介護の問題を考え

これまでの裁判では、会

名古屋の「介護」波紋

「見守る会」が発足裁判の傍聴を続けている。

は我慢や辛抱が足りなかったと見られがち。でも彼女には精神的な支えをする人がいなかった」という。

夫（当時五十八歳）は自宅で印刷工場を営んでいた。長男（三十二歳）と妻（三十二歳）の四人暮らし。昨

長男は公判で「看病のかなりの部分を母に頼っていた。自分は、父が死にたがっていることにも気づかなかった」と証言。また「母

四月に倒れた。事件は六月の入院生活を送り退院して十三日目、リハビリはうまくいかない。不満をぶ

見守る会の事務局は亀井法律事務所（052-196-215460）。

92年2月5日「毎日新聞」

寝たきりの夫を「疲れた」と殺す

二十三日午後二時五十分ごろ、名古屋市北区天道町四丁目、無職矢神昭男さん（五八）の長男（三二）から「自宅

で母親が寝たきりの父親を殺した」と一〇番通報があった。北署員が急行、現場にいた矢神さんの妻、美代子容疑者（三二）が「布きれで、首を絞めた」と、犯行を認めたため、殺人の疑いで緊急逮捕した。

矢神さんが退院した後、美代子容疑者は「退院することができた」「やっと一人でトイレに行けるようになった」などと、親しい人に話していたといい、ごく最近も近所の人から、自宅前でつえをつきながら歩く練習をしている二人を見かけたという。

調べによると、矢神さんは今年四月、脳コウソクで倒れ、後遺症で体が不自由になった。今月十日に退院、自宅療養していたが、美代子容疑者は「看病に疲れた」と供述している。

矢神さんが退院した後、美代子容疑者は「退院することができた」「やっと一人でトイレに行けるようになった」などと、親しい人に話していたといい、ごく最近も近所の人から、自宅前でつえをつきながら歩く練習をしている二人を見かけたという。

調べによると、矢神さんは今年四月、脳コウソクで倒れ、後遺症で体が不自由になった。今月十日に退院、自宅療養していたが、美代子容疑者は「看病に疲れた」と供述している。

矢神さんが退院した後、美代子容疑者は「退院することができた」「やっと一人でトイレに行けるようになった」などと、親しい人に話していたといい、ごく最近も近所の人から、自宅前でつえをつきながら歩く練習をしている二人を見かけたという。

調べによると、矢神さんは今年四月、脳コウソクで倒れ、後遺症で体が不自由になった。今月十日に退院、自宅療養していたが、美代子容疑者は「看病に疲れた」と供述している。

矢神さんが退院した後、美代子容疑者は「退院することができた」「やっと一人でトイレに行けるようになった」などと、親しい人に話していたといい、ごく最近も近所の人から、自宅前でつえをつきながら歩く練習をしている二人を見かけたという。

調べによると、矢神さんは今年四月、脳コウソクで倒れ、後遺症で体が不自由になった。今月十日に退院、自宅療養していたが、美代子容疑者は「看病に疲れた」と供述している。

矢神さんが退院した後、美代子容疑者は「退院することができた」「やっと一人でトイレに行けるようになった」などと、親しい人に話していたといい、ごく最近も近所の人から、自宅前でつえをつきながら歩く練習をしている二人を見かけたという。

調べによると、矢神さんは今年四月、脳コウソクで倒れ、後遺症で体が不自由になった。今月十日に退院、自宅療養していたが、美代子容疑者は「看病に疲れた」と供述している。



91年10月24日「読売新聞」



91年10月24日『中日新聞』

捕した。調べでは、矢神さんはことし四月、脑梗塞（こうそく）で倒れ数カ所の病院を転院後、今月十日から自宅療養していた。右半身が不自由で寝たきりだったという。美代子容疑者は「看病に疲れた」などと自供していること。

寝たきりの夫絞殺

北 看病疲れの妻、就寝中に

二十三日午後二時五十分ごろ、名古屋市北区天道町四ノ一五、印刷業矢神照男さん（五〇）の長男（三〇）から「自宅で母が父を殺した」と一〇番があった。北署員が駆けつけたところ、矢神さんが玄関奥の六畳間の布団の上で死んでいた。傍らでぼう然としていた妻美代子容疑者（三〇）が「午前十時すぎに布切れ（長さ約五十センチ）で眠っていた夫の首を絞めた」と犯行を認め、ため、殺人容疑で緊急逮捕した。

首つり図って苦しむ夫

妻、ナイフで刺殺容疑

横浜の教授宅

91年12月8日、横浜でこんな事件もありました。

八日午後二時二十分ごろ、横浜市緑区元石川町、政法大学第一教養部教授山下民雄さん（五三）の妻歌子容疑者（五三）から「自宅で夫を殺した」と一〇番通報があった。緑北署員が駆けつけたところ、寝室で民雄さんが胸を刺されて死んでおり、歌子容疑者が「首つり自殺を図った夫を早く寝に」してやろうと思つて刺した」などと述べたため、殺人の疑いで緊急逮捕した。調べでは、民雄さんは同日午前一時ごろ、体の不調や仕事上の悩みを訴え、「死にたい」と歌子容疑者に話した。歌子容疑者が用意し寝室のハンカースタンドにかけたロープで、首つり自殺を図った。歌子容疑者は、民雄さんの心臓がまだ動いているような気がしたので、ナイフで心臓の付近を二回刺した、という。民雄さんはアイルランド文学が専門。今年四月からロンドンの大学に単身で留学していたが、予定半ばの十月に帰国。その後は、体の不調を訴えて自宅近くの病院に通院していたといふ。



夫への嘱託殺人事件

名古屋で「見守る会」が発足

昨年十二月十三日、名古屋市中区丸の内の名古屋地裁で、夫への嘱託殺人を問われたM子（52歳）さんの第一回公判が行われた。閉廷後は隣接の弁護士会館で弁護士亀井とも子、世話人代表の団体職員・たちふみ子、ウイン女性企画・高橋ますみさんらによる「見守る会」の第一回集会が開かれた。ウイン女性企画の伊藤登代子さんが報告。

この事件は昨秋十月十三日、脳梗塞によって

のうち、下肢の機能が若干改善されたのみ。

絞殺。

M子さんは、十一月十三日、嘱託殺人罪で起訴された。

に満ちたもの。高齢化社会にむけて、この種の事件は決して特異な事でも自分たちに無縁のものでない。

なお第二回公判は、一月二十九日（水）午後一時半から二時半。そのあと学習会を弁護士会館で開くので、「見守る会」

右半身不随、失語症で将来を絶望視した名古屋市北区のY（当時58歳）さん、妻のM子さんが、再三にわたる夫の訴えで絞殺したもの。

だか完全失語の症状はほとんど改善せず、M子さんは、二人の息子さんにたびたび訴え、息子たちもそのつど励まし続けた。彼らはM子さんが七歳と五歳のときから育てた息子たちである。

息子たちは、町内会長を通じ亀井とも子弁護士に依頼。亀井弁護士は、女性問題を通じて知りあった、たちふみ子さん、ウイン女性企画の高橋ますみさんらに呼び掛け、「見守る会」を結成した。

この裁判は、夫婦の関係、血縁と離れた親子の問題、女性のみに課せられてきた介護のことなど多くの問題をほらんでいる。「見守る会」は、いまだ夫の介護は当たり前とされる社会で、男性たちに裁かれる状況に注目している。

連絡 ウイン女性企画 2052（21）906

二人は十七年前に再婚。印刷業を営むYさんが異常を覚えたのは、昨年の四月二十一日。翌日の二十二日、脳梗塞の診断を受け、十月十日まで入院生活を送る。右半身完全マヒ状態から右半身

しかし連日のように泣きながら手まねで殺して欲しいと頼む夫を力づけながらも、退院後十三日の十月二十三日、二人で共に働いた自宅内の印

生産効率第一の社会は、労働力を失った男性にとっても、不安と絶望

第三回公判は二月二十六日（水）午後三時から。

いのちのルネッサンス

坂下悦子

在宅ホスピスを考える会 ヘトライアングル代表

曾祖父の死

私が小学校三年生の頃でした。年末のとても寒い日に焚き火で暖をとっていた曾祖父の着物に火が燃え移り、あっという間に下半身大ヤケドを負ってしまいました。背中一面の皮膚が真っ赤なザクロのように焼けただれ、ジクジクと流れ出てくる体液で、フトンがぐっしょりと濡れていたのを覚えています。大の医者ギリライの曾祖父は、そのまま自宅で手当らしいこともさせず、数日後に静かに息をひきとりました。

そこには、リンとした曾祖父の意志が通され、周りの人たちもそれを受け入れざるをえないムードがあり、

子どもながら私は、人間の威厳というか、とても厳かな儀式が曾祖父の指示でとり行われているように感じとっていました。自分の最期をどうするかを曾祖父は自分で決め、それを見事に遂行したのです。最後の夜、曾祖父は「モモのかんづめが食べたい」と頼みました。そして、おいしそうに一口かじったモモを、後は私に食べるように言うのです。私はギョッとしました。息も絶え絶えで真っ赤に焼けただれた恐ろしい形相の間がかじったモモを食べろという……うろたえていた私に、再び「悦子にモモをやれ」と言う曾祖父の眼を見た時、フラフラと電気に打たれたように、私はモモにかみついていたのでした。ものすごい気迫がそうさ

せたのです。その曾祖父が半日後には冷たくなり、大八車で焼場に運ばれ梵に付された時、私は悲しみというよりもっと大きなショックにおそわれていました。一週間前までは元気で働いていた人間が、ほんのさっきまで暖かく、話していた人間が、今自分の目の前で冷たく白い灰になっている……どういうことなんだろう？ 私もいつかこうなるのかなあ……そう思いながら仏壇の前にいつまでも座っていたのをはつきりと覚えています。

人間のおこり

高度の医療科学技術が発展してきた現在、私たちはとても便利で、画期的な生活ができるようになってきました。しかし、その中で肝心なことを置き忘れてきてしまったのではないのでしょうか……。

西洋医学は、急性炎症とかショックなど、緊急事態に対しては非常にすぐれています。しかし、慢性化したもの、心が原因の疾病、末期癌には、その限界がみ

えてくるのです。現代の医療は、治す手段がありすぎて、不治の病までも治療していく、つまり過度の医療をしてしまうところに、人が静かに旅立っていくことのできない状態を招いているのです。私が曾祖父の死にショックを受けたのは、死は人ごとではなく、いくら若いからといって、私が明日そうなっても少しもおかしくない現象だということでした。その時、私は初めて、人は死すべき身であることを知ったのでした。平均寿命八十一・五歳であれば、自分も当然八十一・五歳まで生きるものと思い込んでいた……生きてし生けるものには、必ず死が訪れ、その寿命を自分で決められるものではありません。その支えられた寿命さえも、医療テクニクで、何とかしようとすることは、人間の傲慢ではないでしょうか！

そのツケとして「機械に囲まれた死」「スパゲティ症候群」といった人間の尊厳がどこかにとんでいってしまったような死を迎えざるをえない今の現状が出てきたように思えるのです。

死を自分の元にとりもどす

めざましい西洋医療技術の進歩がさまざまな薬や機械を開発してきました。免疫抑制剤、人工心肺により、脳死という今までの観念では対処できないことが起こってきました。脳は死んでいるが、心臓、その他の臓器は生きているという複雑な状態です。死とは何なのか“をいやがおうでも考えざるをえない時代になってきたのです。

先日提出された脳死臨調の答申は、さまざまな反響を呼んでいます。ドナーカードという現実問題が国民一人一人に問われてくるのです。脳死状態になった自分を想定し、その時、自分はどうかするかを、生きている今から考え、そして登録し、自分の意志を明確にしておく必要性が出てきたわけです。国民全員が“自分の死”を現実を意識できるとても良いチャンスが到来したといえるのではないのでしょうか。自分は延命医療をしてほしいのか否か、を考えると同時に、もう一つ考えておくことを提案したいと思います。それは、

“自分の死に場所をどこにするか”ということです。病院かホスピスカ、そして在宅ホスピスカ……。

私は十年余り、看護婦として病院で働き、数多くの死に逝く人々を看取ってきました。そして思うことは、“私は絶対に病院では死にたくない！”と心に決めています。

今の時代的背景、病院の実態を見回し、自分の死に逝く場面をイメージしてみると……今まで人生にかかわってきたものほとんどを捨てる形で入院し、生活の臭いも思い出にまつわる物もない部屋のベッドに寝かされている私。いよいよ死が近づくと、最も側にいてほしい家族や友人は病室の外に出されてしまい、見回すと白衣の医療スタッフと機械たち……か細く萎縮した血管には点滴の針が何本もさされ、鼻には酸素カテーター、尿道にもチューブ、口にはエアークウエイが入れてあり、言い残したい言葉を発することはできない。そして、喉にも穴を開けて酸素を送りこまれ、最後に心臓が停止すると馬乗りになったスタッフに心臓マッ

サージを肋骨がへし折られるほどされ、それでもダメなら、心臓に直接、太い針を刺す……そこでやっとスタッフはあきらめてくれるのです。まるで壮絶な闘いの中で、何度も刃物で刺されるかのように、もたえながらのあの世への旅立ちが、病院で迎える死にざまなのです。はたして、患者本人にとって、ほんとうに幸せで満ち足りた死に方だろうか？ と私はいつも考えさせられたのです。三十年前に曾祖父の死に臨んだような、あのリンとした厳肅で、静寂で、周囲の人たちに無言のうちに伝えたあのすばらしい、いのちの重み”を、私だって、娘、孫たちに伝えて逝きたいと痛切に願っています。

この文明社会に生きる人々が、自分の死に場所を選ぶ権利を奪われてしまっています。病院とは、ケガ、病んでいる細胞を治療する所であり、全人的な観点、つまり、いのちを看る“ことを忘れてしまっているのです。何よりも自分の人生を自分の足で歩むことを大切にしてきたのなら、最期も自らの意志で幕を引き

たいものです。

元気で健康な今から、私はどこでどう死んでいくのかを考え、そして、大地にしっかりと足をふんばった実感を持った生き方をしていきたい……それが明日はわからない、いのち”を思いきり生きることだと考えています。

cure から care へ

医療のあり方について、ヒポクラテスは、病を人に備わる自然の経過とみて、その自然を助けるのを医術と考えていたと言われています。生物はホメオスタシス（恒常性）を生まれながらにもっています。自然治療力、再生力という言葉で表現できるように、過剰な施し、治療は、その生命力さえも削ることになってしまうのです。現代の医療は人の内から湧き出てくるエネルギーさえも押さえてしまういき過ぎに、さまざまな問題が発生してきています。あまりにも医療を過信しすぎ、その恩恵によりかかりすぎてはいないでし

ようか。この身体がすばらしく完成されていることに感動し、内から発せられるものと対話することが、もっとも大切なことと思えてなりません。私が病人になった時、自分の身体に起こっている状況を正確にキャッチし、病院をまず選びます。そして、病名を知り、治療はどうすることがベストかを医師と相談して決めた治療に専念するでしょう。それが不治の病であると判断がついたら、その時点でコトコトからコトコトに切り替えます。つまり、治すことから周りの人々の力を借りながら、残された時間を悔いなきものにするために、生命力を燃焼させるのです。その時点になって、なおコトコトを続けるということは、生を延ばしていることではなく、死のプロセスを延ばしているにすぎないのです。安らかな死を迎えるためには、死のプロセスを延ばす治療は必要ないのです。コトコトの段階に入ったら、自然であり、安心できる環境を望むでしょう。安心は、身体的、心理的、社会的がそろって初めて感じられるものです。身体的には、痛みのコントロール（服用モルヒネ）がまず第一。痛みに対する恐

怖感とは人格まで変えてしまうからです。心理的には、死を事実として受け入れる心境、主治医、看護婦との深いコミュニケーション、社会的には、それをフォローする体制、経済的なことがあげられると思います。人間の尊厳、いのちを最優先した医療にサポートされながら、生に満足し、安らかに自然死していくために、私の死に場所は、在宅ホスピスと決めています。

人にはさまざまな生き方があるように、死にもさまざまなまぎまぎです。しかし、好むと好まざるとにかかわらず、九〇%の人が病院で死んでいく現状では、それだけ選択肢が少ないのが現実です。ホスピスは全国で十か所たらず、在宅ケアは、サポート体制、経済的負担などさまざまな問題が厳存しています。

一人ひとりが自分のいのちをどう全うしたいのかを真に問うていくことで、それを実現させていく活動が始まり、急加速しつつあるのを今、私は実感しています。



病身にならないうちに考えたいこと

第三空間主宰

中根洋子



老後のことも考えて三年前に建てたわが家は、一階が水道工事店、二階は各個室の外は、建具を納めると五、六十名は集えるワンルームになっている。店舗はショールームを兼ねて十人掛けの真っ赤なテーブルを置き、第三空間（サニタリー空間）リフレッシュするところ）と名づけて、女同士、時には男も混じえて井戸端会議を楽しんでいる。

そこへ集まる人たちのネットワークからいろいろな世界が開け、子育て後の私の生きがいになっている。ゆくゆくは託老所にしようね、という友だちにも恵まれている。思いつきで落語の会、一人芝居、ギター演

奏会などしてきたが、昨年の七月から、月一回のシリーズで一日塾を開いている。参加者の中から講師が次に現れて続いているのがありがたい。『自立の夢をかたちに』の著者、高橋ますみさんを迎えて座談会。ベトナム大使までいらしたセミナー。夫の植物友の会の三津井宏さん、馬を愛し馬とかかわること人間を含めた自然環境の浄化を実践しようとしている加藤智泰さん。十一月には、ギタリストの黒野宏通さんとオカリナ奏者中山芳保さんのホームコンサートを楽しんだ。

一日塾より始まったこと

わが第三空間で月一回の一日塾。十二月の講師は、元看護婦の坂下悦子さんをお願いした。スペースウィンでの九月の出会いから、会うたびに彼女の口から出る病院勤務時代の面白いエピソードを、一度皆で聴こうということになったからだ。もちろん、健康に関する彼女の知識もいろいろ教えてもらいたいという希望もあったこと。

第一部「病氣と病身の分離について」

第二部「悦ちゃんのよもやま話」

忘年会を兼ねて、坂下さんの巧みな話術に酔おう、という腰をすえてのダベリング会のつもりで始まった。参加者二十名。高槻市から参加の細野洋子さんは現役の看護婦、看護職の独立を唱えている活動家である。元養護教諭の中根由美子さん、コンピュータ医療事務スクール校長の宗方和子さん、瀬戸市ホームヘルパーの長江さん、新聞記者の広津宏子さんなど、健康に関心を持ち、それぞれの分野で熱心に取り組んでいる人

たちの集まりは、始まるとすぐに個人的な軽い気持ちのダベリ会ではなくなっていった。

「身体に変調を感じたとき、異常のあるとき、あなたはまずどうする？ 軽いとき、動けないほどのときでは」という坂下さんの問いに即座に答えられない。ホームドクターが理想といわれても、街の開業医がどんななくなるという名古屋中心部に住む荒川照子さん。公共交通機関のない藤岡町から参加の方は、自分で救急車を呼んだときの経験から、留守になる家の鍵のことと金銭など自分の持ち物のことなど、困った点を話し出され、個人的な健康の問題をこえて地域社会や医療機関の話になってしまった。

「病とわかって検査結果を聞きにいくときは、どうする？」とたずねられて、夫についてきてほしいという人、看護婦など知識のある人に頼むという人、絶対に一人で行くという人、それぞれに違う。

「不治の病と診断されたときは？」

「病院で死にたくない!!」全員一致。

今の病院は人間が人間らしく死んでいくにふさわしい場所ではない、ということが、今までそれぞれの関わりの中で確信に似た思いになりはじめています。では、どういう方法が現在可能なのか……。

途中からやりだした自己紹介は待ってましたとばかり、今感じている診療、看護に関する不満、不安の発表の場となり、本来患者本位であるべきはずの医療現場で、患者の意志がいかにないがしろにされているかといった問題点を指摘する具体的な体験談が続き、一巡するのにたいへん時間がかかった。

効能が知らされないままなされる多量の投薬。受診する病院を変えるたびに繰り返される苦痛を伴う数々の検査。知識も体力も気力も十分でない患者は、黙って従うほかない現状は、健康保険点数制度の偏りに問題があるのではないだろうか。

わが家の近所の開業医の診察室は、毎日老人のサロンのようだ。常連の顔が見えないと、「どこかお身体でも悪いのでは」と心配し合う冗談のような現実は、家族、社会の問題にまで及んでしまう。

病院を廻りながら仕事をしている宗方さんの説明によれば、現行の点数制で開業医が経営するには仕方ないことという説明は納得せざるを得ないが、われわれ患者側はあきらめるわけにはいかない、かけがえない「いのち」なのに、いったん病身になると全てを医師にまかせてしまっているものだろうか。当然、専門的な技術や知識をだれもが修得できるはずもないので、それはお願いするとして、自分の身体、自分のいのちにはとことんこだわって、大切にすべきなのだ。しかし、今、どうやって？……。およそ、いわゆるお金を払っている消費者の意志が伝えにくい世界は、医療と教育の二つといわれている。大切なことを他人まかせにしてしまっている反省を、今しなければいけないのではないだろうか。

メンバーが一人の例外もなく問題意識を持っているのに、今まで話し合う場所、機会もなかった、ということ。たとえば、刑事事件になる医療事故などにならない限り、訴えるてだてもない。

ただ、あそここの病院は良いとか、親切な先生だとか、

割のいい情報をキャッチするためなく、われわれ一人ひとり、医師、看護婦、患者、とりあえず今健康な者全員がニーズを出し合って、問題点を検討していく機関、制度を作っていくための活動が必要になってきていると思う。

たまたま集まった仲間の気持ちは、具体的に何ができるかというところへきたが、夢を語りながら、現場の現実を聞いてガツカリの繰り返しで朝になってしまった。

在宅ケアと看護婦開業について

想像力の限りを尽くして、自分が健康でなくなった時のことを想定してみる作業など、やりたくないと思ってきた。知らない病気もいっぱいあって、何が起きても仕方がない、怖がっているは暮らせない、その時考えるわ、と避けてきた。とりあえず健康な時はそれですませていても、人はかならず老いる。そして死ぬ。たとえ病魔におかされなくても、動けなくなり手助け

がいるようになる。

一日塾での医療についての話し合いをきっかけに、死ぬときのことを真剣に考えてみるようになった。

「死ぬのはイヤだ、死ぬのはこわい」

—イヤだっていったって皆死ぬのよ—

「たいてい病気になって、苦しんで死ぬんでしょ」

—何がこわいの？—

「いたいのがこわいよ」

直腸ガンで苦しんで死んだ父の顔が浮かぶ。

—痛みなんかとれるのよ、今は—

「良かった。ほんとね」

と少し安心する。

でも病院で死にたくないと望む私は、どんな選択をすればよいのか。ホスピスに入ることが不可能となれば、家ということになる。どうせ死ぬのだとわかっていても、医師の診断なしに時を待ち、苦しみに耐えるのは不安が大きすぎるし、看護はだれに頼めるのかという大きなカベに突き当たる。夫は？ 息子は？

山崎章郎氏の著書『病院で死ぬということ』（主婦

の友社)の中に引用されている一節「患者がその生の終りを住みなれた愛する環境で過ごすことを許されるならば、患者のために環境を調整することはほとんどいらない。家族は彼をよく知っているから、鎮痛剤の代わりに彼の好きな一杯のブドウ酒をついでやるだろう。家で作ったスープの香りは彼の食欲を刺激し、二さじか三さじの液体がノドを通るかもしれない。それは輸血よりも彼にとっては、はるかにうれしいことではないだろうか」を読んで、そのとおりだと感動しながらも、つい見る側に立ってしまうと不安は否めない。

そんなとき東京で在宅ホスピスの訪問看護婦をしている高木睦子さんより、開業看護婦の話聞いた。まったく思いがけない発想のシステムに、私は大きな興味を持った。新しい道が開けるかもしれないと、早速情報収集に動き出した。

開業看護婦とは、在宅療養する患者が安心して生活できるように、医師と連携をとりながら看護を提供していく仕事である。患者や家族の状態に応じて、訪問

の回数を決めていく。高齢者では多くの場合、入院加療後、在宅療養になるが、在宅では充分なケアができず、再入院のケースが多いという。それぞれの家庭における環境に合わせた指導が全くなされていないという結果と、看る人がいない、できないからだ。たとえば、退院時にこれから訪問看護をする者が医師の指示を聞き、一緒に家に入り、その患者が生活する人的環境、家のつくりなど実情に合わせた看護の方法を提案、指導したなら、患者も家族も安心して暮らせるにちがいない。病状のチェックは、経験豊かな看護婦なら医師に正確に伝わる。リハビリが必要な場合でも、家でできる方法が見つかれば通院の必要もない。余分な神経と体力を使わずにすみ、家族のペースに合わせた生活がしやすい。また必要な介護用品の購入は、セットで買わされて使えない物に高額を払うことのないように、アドバイスしてもらえたら無駄がない。看護する家族の健康状態、精神状態への配慮もあれば、共倒れになることが防げる。

良いことづくめではないか。何という素晴らしい発

想と喜ぶのは早かった。

すでに名古屋市内で在宅看護センターを開業している、新出よしみさんを訪ねた。山のような困難をかかえて、彼女は頑張っている。

大きな問題は三つ、①経済面 ②人材面 ③医療の

あり方の面、見る側と看られる側に共通している。双方の条件が整わなければ、いくら患者が望んでも実践不可能なことだということが、彼女の話でよくわかった。①については、現行の点数制料金を基準に支払う費用を決めているが、とても経営が成り立つ金額でないこと、しかし患者にとっては公的援助がないため負担が大きい。②については、経済的に保障できない職場に、看護婦の確保はできにくい。ただでさえ看護婦不足のときである。一方、核家族の老後は、夫婦二人ぐらしが多い。介護するのはどちらかになる。老齢ではきつい仕事はできるだろうか。ましてや常に家事参加していない夫は。妻、嫁をあてにする方法は間違っている。となると誰が……。③は患者の意志を尊重した医療、ガン告知、安楽死についてなどのことだろ

う。また、①②に対する遠慮から、家族に迷惑をかけたくない和我慢している患者の気持ち。「病院にも入れないで」と言われたくない家族の見栄など、一人ひとりの意識の違いに関わってくるからむずかしくなる。諦めてしまいたいそうになりながら、

「家で死にたい！ 病気のときは家にいたい」
と思うのがそんなに贅沢なことなのかと、腹が立つてくる。

これしか方法がないとも思わない。各地各方面での取り組みも行われているから、いいシステムが生まれるかもしれない。でも、個人がそれぞれにニーズを出し合う作業なくしては、理想の形は絶対できないと確信する。行政の側から都合のよいシステムに憤慨するのは、もうやめにした。

残念なのは、矢神さんの事件のこと。もしも大きな負担もなく開業看護婦と医師の連携がとれて、ホームヘルパーとともに看護婦が訪問する方法があったなら、事件など起きなかったかもしれない。

身近にも同じような心配のある知り合いもいる。これからはもっともっと増えるにちがいない。悲しい事件が起きないように知恵を出し合う必要性をひしひしと感じる。それには自分自身がどう在りたいか、考えなくとも取り組んでみよう。そして身近な人から話しかけてみよう。道はそこから開けるような気がしている。

現在、働きながら看護職の在り方に疑問を持って、多くの看護婦さんの声、医師、患者さんの声を集めて、安心して老い、死ぬる社会をめざす活動を始め

います。

一日塾に集まったメンバーを中心に、毎月一回、勉強会をしています。四月には大阪へ山崎章郎先生のお話を聴きに行く予定です。全国各地の実践例など知りたいと思います。ご協力下さる方、ご連絡下さい。

〒401 豊田市野見山町一〇六一五

0565(88) 3846

中根 洋子

人間と社会と地球の再生のために

——ヨーロッパ15ヶ国で配られた フェミニスト／エコソシヤリスト による「緑の対案」の要説

☆〈要訳の原本〉ラ・デクーヴェルト社・一九九〇年刊行のフランス語版

☆〈解説〉要訳者 江口 幹

☆〈感想〉大沢純子／岡 徹／金住典子／久保木知恵子

雑質文香／しま・ようこ／下重喜代／円より子

販価 七〇〇円

※一般書店では販売していません。
お申し込みは
送料(1冊175円、2冊210円、4冊260円)を添えて

ネットワークちきゅうへ

〒170 東京都豊島区東池袋1-45-11
メゾン金子202
☎03-3985-3308



乳ガンの手術を体験して

(マナー講師) 下村美恵子



手術からほぼ半年。まるでウインクしているような胸のあたりにもずいぶん慣れてまいりました。私事がウイン女性企画のインフォメーションに載り、世間をお騒がせしましたのも、私の病気をきっかけに、皆さんが乳ガンに関心をもち、今一度自分の健康を振り返っていただくことができたなら、そして私のようなチャンスをつかんでいただけたらという気持ちからでした。そこでお騒がせついでに私の場合の一部始終をご報告したいと思います。

ひょっとして……私も

「三十歳を過ぎたら乳ガン、子宮ガン検診を」という

保健所のすすめなどまるで無視して十年、この私がなぜ乳ガンを初期の段階で発見できたのか、それは友人の見舞いがきっかけでした。乳ガンの検診や手術を産婦人科ではなく外科ですることさえ知らないほど無知であった私は、暗い気持ちでおそろおそろ手術を受け、たばかりの友人の病室を訪ねました。

意外に友人はあっけらかんと「最近、乳ガンの人は多いよ。検診を受けたほうがいいよ」、と言い放ち、「しこりってどんなふう？」と聞く私に「パチンコ玉にガーゼをかふせたような……」と答えました。え！おや？ と私はハタと思ひ当りました。私の右胸脇にも小豆大の固い粒がコリコリ二、三個あるではないか。ひょっとして……と私の頭をよぎりました。

暇をみつけて受診したのはそれから二週間後。病院は友人の入院していた病院を選びました。胸腺外科が専門の病院で経験豊かな医師にみてもらうことは大切であると思います。私の知り合いに、近所の市民病院で経験浅い医師にかかり生検を受け、その診断の不確かさとその縫い合わせの悪さによってガン細胞が増殖していたケースがあるからです。

まず初診では、触診の後、超音波をあてレントゲン撮影をしました。その結果ではガンらしきものは認められませんでした。「しこりは取っておきましょう」という医師のすすめで十日後に部分麻酔でしこりの部分を切除しました。切り出されたしこりは魚のはらわたの脂肪のようなもので小指の第一関節ほどの大きさでした。これがいわゆる生検というものでしこりの中にガン細胞があるか顕微鏡でみてもらうためガンセンターへ送られたのです。そして、この結果、私は「初期の小葉ガン」と診断されました。小葉というのは、乳房内に、無数にある、その字のごとく小さな葉っぱのような細胞のかたまりで、小葉ガンは日本人には非

常に珍しくむしろ欧米人に多いとのこと。手術方法は乳房を全部切除するのが望ましいと伝えられました。また、メスを入れているので手術はなるべく早くしたほうがよい、では八日後（入院は六日後）とその場で決まってしまうました。

乳ガンと告げられてから

友人の見舞いから自分が乳ガンであると伝えられるまでの感情の軌跡をみると「バチンコ玉にガーゼ」と聞いた時の「もしや」という直感的なひらめきによって、五〇％はそうかもしれないという気持ちが徐々に心の準備を始めていたように思います。そのため、結果は自分でも驚くほど冷静に受け止めることができ、受診後まず家族に電話を入れた後、私が入院中にしなければならぬことを他の人に依頼する電話をしました。

意外にもガンであったことのショックとか手術への恐怖、乳房を切除することへのためらいなどはあまり

なかったのです。深く考えない性格が幸いしたのか体に悪い物は取らなきゃしょうがないとアッサリ思ったのか？　ともかく後で思うと生検によって陽性と出たのはかえって良かったと思うのです。しこりの中にガン細胞がありながら標本の部分にガン細胞がなく陰性と出たならば、乳房内のガン細胞を大事に抱きながら数年間過ごしていたかもしれないからです。

情報収集

さて、入院までの六日間をどのように過ごしたか、まず、乳ガンに対する情報を集めました。ひとつは本を読むこと、そして、知人友人の話を聞くことによつてでした。折しも『乳ガン治療、あなたの選択』（近藤誠慶応医学部放射線科医師著）をウィン女性企画の常連の常陸薫さんが持っていらっしやったと高橋ますみさんが紹介して下さいました。この本によって外科手術には乳房のみならず胸筋まで取ってしまうハルス・テッド手術と乳房全切除して胸筋は残す方法、そして

乳房温存療法があるのだということ、著者は乳房温存療法と放射線療法をすすめていることがわかりました。偶然にも同窓会の問い合わせで音信不通であった慶応病院の外科医師をしていた同級生から連絡があったのはこの本を読み始めた頃でした。

私は何だか運命的なものを感じ、彼に相談したところ、彼は外科医としての立場から助言をしてくれながらも、夏休み中の近藤先生に何かとコンタクトをとってくれました。いつでも外来で受け付けてくださるということ、夏休みあけの受診日はちょうど手術予定日。私の心は戸惑いました。この時の心境はやはり全身麻酔をして乳房を全部切除するという大きな手術を受けるよりも、一部を切除して放射線をかけるという情報を得るとなんとか軽い手術ですませたいと気持ち動いて入院をみあわせようかと迷い始めました。そこで疑問点や心配なことを質問事項としてまとめ、入院するはずの病院で医師の話を聞くことにしました。

もう一冊、私にとって貴重な情報源は、かねてより“スペースウィン”の書籍コーナーにあった「からだ

・私たち自身」（松香堂出版）です。自分の健康を信じて疑わなかった時には気にもかけなかった本でした。この本は私に、乳ガン治療は外科手術だけではない、さまざまな選択肢があるのだということを見せてくれました。また「あけぼの会」という乳ガン体験者の会の存在を知り、その電話相談で温存療法と放射線治療のことも含めて相談をすることができました。対応してくださった方の「いちばん大切なことは命がかかっているということ」ということばは私がどんな治療法を選択するか最終的な判断に決定的な影響を与えたのでした。（因みに一九九一年十月三日号の中日新聞の切り抜きを添えます。）

私の手術までの六日間でした情報集めは、ひとつは「本によって」でありもうひとつは「人に聞くこと」でした。私は自分の病名を人に伝えることに対するためらいがなかったのはかえって良かったと思っています。「近所の人も二、三年前に手術したけれど元気よ。右？ 左？ 左は心臓があるから右で良かったじゃない」と励ましてくれる人から、処置法のアドヴァイス、

女のニュース

乳がん早期発見キャンペーン あけぼの会

乳がんによる死亡者は年間六千人。参加費は千円。
 ①乳がん電話相談受け付け
 期治療されれば、そのうち四千人は、既にあるがんの仲間、電話0568(62) 4686
 死ななく済む。そんな、いわれ。そんな、電話0568(62) 4686
 中で、乳がん体験者の集まり「あけぼの会」は十月を0567(31) 4302
 「乳がん月間」として、早期発見、早期治療を訴えるキャンペーンを始めた。愛知支部が「ト」や「電話相談ミニアル」も作製し、どんな患者にかかったのか、この問いをほじめ、術前術後の悩みに、ついても悩むる態勢を整えた。

小冊子や体験発表、電話相談も

①小冊子「乳がんかなと思ったら——病院を選ぶ、医師を選ぶ」を希望者に郵送。一部自付。送料七十四分を含む切手三十四「あけぼの会愛知支部」まで申し込む。
 ②講演と体験発表の集い
 二十七日午後二時（開場は一時）から名古屋市中区大井町の市女性会館で、会員の村本真知子さんと石井和泉さんが体験談を話し、愛知がんセンター乳腺（せき）外科副部長の三浦重人さんが「乳がんの再発について」をテーマに講演する。下書きは話している。

他の医師の紹介までさまざまな情報が集まったからです。なかでも友人から紹介された医師は現代の化学薬品漬けの医療に疑問をなげかけ、独自の焙煎方法で生薬を開発した土佐清水病院の丹羽耕三博士です。その著書『本音で語る医療と健康』で述べられている考えは十分納得のいくもので、私は術後の薬は化学薬品の抗ガン剤を飲まず、丹羽博士の薬を服用しています。

手術法のみならず薬も、集まった情報の中から最終的に自分が信じられるものを選択するのが良いと思っています。

結局手術方法は乳房全摘出の外科手術を受けることにしました。というのは筋肉は温存されること（筋肉まで取ってしまうハルマテッド手術ではないこと）、乳房を一部取り放射線をかける方法で生存率に差がないとする近藤誠医師のデータも少ない症例の中での結果ではないかと思われることと放射線をあてることによって正常な細胞もやられてしまうのではないかと完全性に確信がもてなかったことによります。

その後、近藤医師が名古屋市近郊の日進町で、講演なさるといふ情報を得、出かけました。近藤医師は、乳ガンのみならず他の部位のガンの外科的手術の弊害と放射線治療の効果や、技術の進歩を力説なさいました。たとえば、昭和天皇はすい臓ガンで、ご高齢であったため、すい臓を直接摘出しなかったため、寿命がのびた。一方、故小佐野国際興業社長は、外科手術を行ったため、一、二か月で亡くなったということです。私自身、この説明を聞いてもなお、放射線の安全性に対する疑いはぬぐえなかったのですが、傾向として欧米で乳ガン治療は乳房全摘出の外科手術ではなく乳房温存の放射線治療に移行しているようです。

いよいよ手術

そうこうして八月十一日入院、十三日午後、手術の時刻となりました。手術着に着替えベッドごと手術室に運ばれました。ひんやりした手術台の上に横たわると、手足を縛られ、七個の手術用ライトに照らされ

ました。耳に聞こえるのは医師や看護婦さんらの話し声と手術用手袋を洗浄するシャカシャカというブラシの音です。いよいよ用意が整い麻酔がかけられ、記憶がとぎれます。薄れゆく記憶の中で、私の手術のためにこんなにたくさんスタッフが担当している。自分の命が多くの人によって生かされているのだと感謝していたのを覚えています。

無事手術も終わり、多少麻酔の影響で胃腸が弱り食欲のない日が三日ほど続いたものの、その後は日に日に回復し、リンパ液を体外に排出していた管も六日目にはずしました。その後の三週間、食事はすえ膳、一日の時間は自分のためだけにたっぷり使える、主婦としては夢のような生活を送りました。腕の上げ下げの機能回復運動も私にはあまり苦痛でなく、早くから手が上がるようになりました。毎日、同病の人たちと共に屋上で朝のラジオ体操、そして近所の散歩で一日が始まります。

A子さんは六十代後半、助産婦で赤ちゃんを母乳で育てるように指導する立場から一日に何人もの乳房を

もみほぐしていたにもかかわらず自分の異常に気づくのが遅く、それはショックだったそうです。

B子さんは四十代、子どもはなく夫は外科医。デザイナーとして、あるコンクールへ出品した後、しこりを感じたといいます。夫に打ち明けた時、身近にいながらなずもっと早く発見できなかったかと夫のほうにショックを受けたようだったとのこと。

C子さんは広告代理店に勤める元氣な五十代、一年ほど前乳汁に血が混じり受診。その乳汁による組織検査ではガン細胞は認められず「三か月後にまた受診しなさい」という言葉を守らず九か月間放っておいたところ、しこりになりそのしこりが大きくなっていたといえます。

D子さんは六十代。半年前に胆石の手術をし、その後自分でしこりを発見。近所の外科二か所で受診し両病院が乳ガンと言われても、なお、もう一か所大病院で診断された後四か所目で観念して手術を受けたのだそうです。

こうして患者どうし集まり話し合うと病状もさまざ

ま、入院までの経過もさまざまです。乳ガンというとさぞ暗い入院生活を送っているだろうと想像されるかも知れませんが、私の入院した病院は医師や看護婦さん方が患者に明るく声をかけ、また患者どうしも傷を見せ合ったり情報交換しあったり、ロビーはいつも笑い声が響いていました。

なぜ乳ガンになったのか

そんな時いつも話題になるのが、なぜ乳ガンになったのか、これから何を気をつけなければならぬかということです。A子さんやD子さんは、原因が精神的ストレス以外考えられないと言い、B子さんやC子さんは無理して仕事をしたためだと言います。ひとつの側面としてガンになりやすい体質と遺伝的要素はあると思います。

実はつい最近、私の姉が同じ病院で乳ガンの手術を受けました。姉の場合は二年ほど前にしこりに気づき、生検をして結果が陰性であったため放っておいたので

す。生検の傷の治りが悪いと思い悩んでいたところ私の一件があったのです。実の姉妹でも性格が違い、すぐに診察を受ける踏ん切りがつかず、ぐずぐずしていたので「乳ガンならば早く処置しなければならぬし、そうでなければ悩みは解消するのだから」と強く受診をすすめ、私の退院日に診察を受けました。果して医師のことばは「経験上間違いなく乳ガン」。姉の落胆ぶりはそうとうなものでした。その後姉は丹羽博士と別の病院でも受診しています。丹羽博士にいたっては「一二〇%間違いなく乳ガン」と言われ、やっと手術を受ける気になったようです。その気にはなったもののそれから二週間ほどかなりえん世的になり、私も自分の予後より姉のことのほうが心配でした。ところが手術を受けてみるとなんのことはない、元氣元氣。退院はまだかと医師をせつく程の元氣さに周りの者があつけにとられています。

ともあれ私と姉は遺伝的にガン体質なのかも知れません。ガン予防に気をつけなければならないのは食事面で脂肪を控え、ビタミンAやCを多く含む、緑黄色

野菜を多く摂取するよう心がけることはよく言われることですが、丹羽博士は肉類は食べないよう（たん白源は白身の魚と貝類で補うよう）、コーヒー、チョコレートも避けるよう指導しています。一杯のコーヒーも飲めないようでは生きる楽しみが半減したようなものだと思いますが、少なくとも今は控えています。

予期せぬ闘い

退院後、予期せぬ闘いが待っていました。一種の虚脱感との心の葛藤です。何しろ、今まで考える前に行動していた私ですからしなければならぬ事が目の前にあってもヤル気がおこらない、体がついてゆかないのはなんともはがゆい限りです。やはり体の一部を失ったことで気力も空気をれをおこしているのでしょうか。そんな時はフツと鏡に映る自分の顔にも笑顔が消えています。そういえば病室に毎日お手紙を下さった「ヘイン女性企画」の小林良正氏も「笑顔、笑顔が忘れずに」と何度も励まして下さったなあと思い出すの

ですが、笑顔はこわばります。他の人と共にいても朗らかさについてゆけない。そんな時期がしばらく続きました。

今ようやく、ヤル気はおこらないように体をかばっているのだと思えるようになりしばらくのんびりヤッティコウじゃないかと自分の怠け心と上手に付き合えるようになりました。いま四十歳で充分社会復帰できる年齢でも、病後の虚脱感に悩まされました。もっと高年齢で、致命的なハンディを背負うような病気になった時には、立ち直るのがもっと困難になるのではないかと、高齢化社会のひとつの問題点として思いを寄せました。

先日、グループのメンバーの中根洋子さんの紹介で、とある方からお電話をいただきました。ご自分が乳ガンではないかと悩んでいらっしやるとのこと。私の知識でお役に立てばと思い充分お話しし、ぜひ勇気を持って受診するようおすすしめました。万が一のことを考え、森 美恵子さんの保険に入って入院特約を手續

きした後ではどうかとつけ加えました。私のことがきっかけて、ひとりでも多くの方が安心し、万が一乳ガンであったとしても早く気づいてもらえたら、このように紙面をさいていただきご報告したかいがあり、私の“生かされた命”のひとつの役目が果たされた事でもあります、こんなにありがたいことはないと思っています

す。最後になりましたが、お見舞い下さった皆様、本当にありがとうございます。報告する場と機会を与えて下さったことに感激いたします。私が自分の病気に動揺せず素早く対処できたのは何よりも「へあこら」から生まれた「ウイン女性企画」の活動によって自分が成長できたおかげと思っています。

田中寿美子さんの著書

『ジュスマ・マンシウルさん物語』

——インドネシア母系社会に生きた日本人女性——

を買って田中さんに声援をおくりましょう。

女性問題の大先輩、〈へあこら〉の会員でもある田中寿美子さんが、ご病軀を押して出版されました。「これだけは書き残したい」と病床で情熱を傾けて書かれたご本です。〈へあこら〉の活動資金の一助にと、多数ご寄贈下さいましたので、定価2266円を送料こみ2000円の特価でお頒ち致します。ご一読の上、葉書一枚でも感想をお送りください。

ドメス出版刊

斎藤 千代さんの著書 『見えない戦争』 も会員価格でお頒ちします。

PKO阻止、不戦の思いをこめて、斎藤さんが初めてご自分の本を出されました。多数ご寄贈がありましたので、会員の皆様には定価1545円のところ、送料こみ1200円でお頒ちします。「国際的貢献」を云々する前に、湾岸で日本はどんな貢献をしたのか——ぜひとも読んで頂きたい本です。なお五冊以上ご注文の方は、さらに割り引きします。ご一報を。振替用紙を入れておきました。

BOC出版部刊

堀 久美子

女性建築家による岐阜県主催の住宅コンペの審査員をして三年になる。審査委員長は若手女性建築家ではナンバーワンといわれる長谷川逸子さんと、最初の打ち合わせの時「女性だけの住宅コンペは日本で、いや世界で初めて」と長谷川さんに聞いて、とても嬉しく晴れがましかったのを覚えている。私はその時、地元のタウン誌の編集長だった。

そのコンペの二回目のテーマが、「高齢者同居二所帯住宅」で、この時は特に東京、名古屋から高齢化社会や社会福祉の専門家三人が加わった。一泊二日をかけて約百点の応募作品から優秀作四点を選んだのだけれど、食事時やティータイムには女ばかりの審査員十人ホソネの話になる。

「同居なんてとんでもないわ。家にも病気の年寄りがいってね……」

「家もたいへんでね……」etc。

羽田澄子監督の『安心して老いるために』という映画をご覧になっただろうか。岩波ホールで五か月間ロングランしたこの映画の舞台となったサンビレッジ新生苑は、私の住む大垣市の北、池田町にある。ここの施設長石原美智子さんは取材で何回かお会いしている。一年ほど前やはり県主催の長寿社会シンポジウムのパネラーになったので、お話を伺いにお邪魔した。私が「私たち女友達どうして、老後はいっしょに暮らそうよって言っているんですよ。子ども

たちには東京でも世界のどこへでも行きなさいって言って……」と言うと、すかさず「それは親のエゴですよ。つまり自分の子どもには三Kの仕事をさせたくないってことでしょ」と言いかえされて、ドキリとした。

そして昨日、元大垣親子劇場運営委員長、今はサンビレッジでヘルパー養成講座の講師をしたり、ヘルパーとして自らも働いている友人と久しぶりにゆっくり話をした。

「結局私たちが一番たいへんなのよ。子どもは出て行ったら帰ってこない。でもお金があればヘルパーは雇える。でも、心の淋しさはヘルパーではどうしようもないの。」

だから友達をたくさんつくっておくことね。歩ける範囲、タクシーで行ける範囲、電話でおしゃべりできる範囲、そして十歳年上と十歳年下の……」

「エッ？」

「同年齢では介護はムリよ。そして、子どもには、あなたの住む町の隣近所のお年寄りを大切にしてねって言うのよ」

「さっすがあ！」

私は五歳年上の彼女をまぶしく見つめかえた。

(元タウン誌編集長・フリーライター)

あごらメイト

ハ！ ヒ！ フ！ ヘ！ ホ！

中根洋子さん



一九九一年八月ベトナムの報告会、さらに九月、高橋ますみ著『自立の夢をかたち』をどう読んだかのシンポジウムで、あざやかなオレンジ色のスーツをサラリとイキに着こなした第三空間主宰、中根洋子さんとの出会いは、欲求不満の私の脳の中にスルリと入ってきた。

地域活動、PTA活動をしていく中で、何か物足らなさを感じ、従来の延長線上に論議をのせていくことに少々うんざりしていた時だった。

“あれー、おもしろい女性だなあ”と直感したインスピレ

ーションは見事に的中した。

スペースワインでの毎週火曜日のおしゃべりタイムに参加してみると、やはり彼女はキラリと光っていた。

発想が型どおりでないのである。

彼女が考えつくことには……

「ハッ、な、なんだ?」とまず内心驚く(私)。

「ヒエー、ちょっと、どうしてよお」と真意をさぐりたくなるほどきわどい? 発想。

「フーン、そうか、そうか」だいたい納得してきた。

「ヘエー、おもしろいじゃない」もう、のる気充分。

「ホーホー、やってみるか」

と誰をも引き込んでしまう不思議な魅力のある「ハ！ヒ！フ！ヘ！ホ！の洋子さん」

そんな洋子さんの主宰する第三空間・一日塾に、テーマ“病氣と病身の分離”をひっさげて乗りこんでいった。

そこに集まった彼女の地域の仲間には、おどろくほど層が厚く広いことにびっくりした。

弁護士、新聞記者、教員、看護婦、大学の教授、医者、画家、書道家、染色家、陶芸家等々。さまざまジャンル

の人間味あふれるあったかいネットワークが広がっている。型にはまったお勉強会ではなく、それぞれが自分の考えや方向性をどんどん出していくことによって深まり、そして高め合い、感受性という波がビンビンと響き合う、とてもハイパワーな時間が過ぎていった。時計を見ると、なんと十五時間にも及ぶ大熱弁をふるっていたのである。なんとという集中力、パワー……。

広々とした第三空間に多種多様な人々が集まってくるその理由（わけ）、つまり、中根洋子を解剖してみると、

まず自分に正直であり、かつ、自分を大切にしている。そして好奇心のかたまりであり、本物を求め続けている。十年、二十年先を見つめ、今を生きる機敏な行動力がすばらしい。

何よりもオシャレであり、センスがいい（あっとおどろく服をなんなく着こなしてしまふ五十歳）。話しこんでいくと、ストーンと腑に落ちる快感を味わえる。

「洋子」の字のごとく、大海に抱かれたような安心感とここちよさ、そして甘くみるとのみこまれてしまふ緊張感。そのバランスがとてもいいのだろう。

その不思議な持味は、お寺の娘として生まれ育ったことに起因するのか、生まれながらのDNAか……。

まだまだ出会いから半年あまりでは、彼女の持ちえているパワーをほんの少しかいま見ただけにすぎないのだろう。これからはもっともっと共有の時間を持ち、彼女の核心に触れていきたい想いかられているのは私だけだろうか。

— — —

女がどうした、男が悪いという観点をとびこえた、まるごとすべてひっくりかえって人間という視点に立った洋子さんの発想に、今後ますます共鳴してくる大脳がたくさん出てくるだろう。

年を重ねていくすばらしさを心身ともに表現し、示してくれる人に私はやっと出会えた。

ありがとう、洋子さん！

（坂下悦子）

男の生き方について

あんな本、こんな本

私たちは女性の自立に気づかされる

と、どんどんネットワークを広げ、視野が広がっていく。子どもの教育、自分たちの働き方、老後の生き方、また世界中の貧困にいる人、原子力の恐ろしさ、食品の安全性やゴミに関することまで自分の問題として受けとめる。

ところが男性はどうだろうか。私の夫は未だにゴミを分別しようとしないう。ゴミは何でもゴミ箱か、台所の勝手口に投げ込まれる。だれがそのゴミを拾い、分別し、捨てるのか。会社のおびただしいダンボールも、夏でも手っ取り早く燃やしてしまうという。資源になるとわかっていても、人手を使い採算が合わなければ、みな切り捨ててし

まう。

そういう男性が当たり前のなかで、男性自身が男の生き方を考えるようになってきた。新聞で紹介された、

「思いこみ」からの脱出

『新しい男女像を求めて』

中村彰著

幻想社

189ページ 定価1000円

一九九一年九月十月初版

は、男性学という視点で、「男は変わりうるのか？」と問うている。「男である自分を問い直し、これまでの男の殻から抜け出したい」と真剣に考えて

いるという。女性問題は女性側からの長年の取り組みの実績はあるが、男性側からはいま始まったばかりで、「男性学元年」といつている。えっと驚いてしまいが、でもとにかく男性側からはっきりと意思表示があったのだから喜ばなくては。著者自身、数年前の三十代から四十代への節目の年に、これまでの自分やこれからの生き方にこだわりを持ったという。

性のことも大胆に分析し、新聞での人生相談を豊富に取り上げ、興味深く読めた。夫にも読んでねと勧めている。軽いノリで男女平等を実践している村瀬春樹さんの

『パパはママを愛さない』

村瀬春樹著

アルトマン出版

125ページ 定価1400円

一九九一年十一月二十日発行

は、軽く読めて、多くの問題を追求している。「結婚生活はナゾと不思議でいっぱいだ」を調査データや事件・事例を通して解説している。性別役割をやめようと熱いメッセージも送っている。

「女だけに自分のメシを作らせたり、パンツを洗わせたりしないのだ。自分のことは自分でやる。それがアタリマエだから」と。

自分の結婚については、

「彼女は文字どおりの人生の共同経営者（パートナー）である。ぼくらは一

九六九年に結婚してからの約二十年間、ほとんど毎日いっしょに食事し、ひんばんに口論し、口論した回数より一回だけ多く仲直りし、同じ布団で眠り、時々セックスしている」と書いています。

そしてあとがきに、

「あなたがハッピーになるのは、『女らしさ』と『男らしさ』を捨てることから始まるのだ」と結んでいる。

私たち女性にはたして「女らしさ」を捨てることができるのだろうか。こ

のからだのすみからすみまで刷り込まれ、しみついてしまっているものを。それ以上に男性は、「男らしさ」を捨てることのできるのだろうか。

この二冊の本を通して、男性のこれからの生き方の方向が見えてきたように思う。しかし、こういう考えを持つ男性はまだまだほんの一部だ。ぜひこの二冊を読んでみてほしい。できれば愛する男性と一緒に。

（ウイン女性企画・吉川富士子）

高橋ますみ著

主婦が歩きだすとき

門 玲子著

江馬細香

よしもりしげお文
さなだふさえ絵

伊予のはっさく

女による女の

BOC出版部

〒160 東京都新宿区新宿1の9の6



「あ」ごらに届いた年頭メッセージ」

◆昨年は年間版ODAというべき「章の根援助運動」の仕事で明け暮れました。そのため、フィリピン、タイ、マレーシアなどアジアの国々を毎月のように訪れました。そこでは、NGOやPOといった住民組織が都市のスラムで、農村、漁村で、山岳民族の間で、自立、自助のオルタナティブな開発プログラムを計画し、実行しています。そしてこれらは、国内各地だけでなく、国境を越えて強力なネットワークが形成されていることを知りました。狭い日本の中では、湾岸戦争後、そしてソ連邦が解体同然になった今日、アメリカの新国際秩序が支配しているように思われていますが、これは全く皮相的な見方だと思います。歴史と未来は、これまでの開発の犠牲者たち民衆によって創られていることを学んだのは、

「章の根援助運動」の活動を通じてでした。

今年は、本来のものの書きの仕事にはげもうと決意いたしました。戦争と革命の世紀であった二十世紀を総括する現代史の本を書きあげるつもりです。

(北沢洋子)

◆戦争と平和について考えさせられた昨年でした。春にはタイで泰緬鉄道の跡を辿り、夏には香港で軍票被害者たちを訪ね、秋には沖縄で亡くなった元朝鮮人慰安婦を偲び、アジアの人々に戦争の償いをしていない日本を思い知らされました。そこへ湾岸戦争「国際貢献」の名目で再び戦争に加担する日本に危惧を感じます。その一方で、生存権さえ奪われる第三世界の子どもたち。その姿を「アジアに生きる子どもたち」(労働旬報社)というブックレットにして昨秋刊行致しました。

東西冷戦から南北問題へ一痛めつけられる「南」の側に立って、「北」の一国である日本を今年も問い続けるつもりです。

(松井やより)

◆湾岸戦争に始まり、ソ連消滅に暮れた昨年、わたしにとってもなにやら不燃焼な年でした。PKOが成立しなかったこと、初めて韓国を訪ねたことぐらゐが収穫といえるでしょうか。ソウルから汽車で南下して雨の釜山港に立ったとき、五十年前、ソウルで生まれたわたしが同じ道筋をたどって日本に帰ったことを思い、奇妙な感慨にとらえられました。今年はそれをじっくり考えてみたいと思っています。

(加納実紀代)

◆アレヨアレヨと言わんばかりの世界の動きに目を見張る思いでいます。こんなに激しい歴史の巨きなうねりがかつてあったでしょうか。個人の力の影

響、測ることのできない時代の流れ固定観念に縛られずに自分の芽で見ていきたいと思っています。

さて山本裁判の一審勝利判決直後に、出された全基労の昇格差別事件も完全勝利して女性にとって大きなクリスマスプレゼントになりました。平等への流れも確かなものになりました。

(山本和子)

◆私にとって九一年最大の出来事は、「掛け」のような引越でした。思い切って本当に良かったと、今は大満足しています。

世の中の出来事では腹の立つことが多く、その最たるものはPKO法案の強行採決でした。居ても立ってもいられず、国会議員に抗議のハガキを出しました。状況次第では、このささやかな抗議を今後も続けていきたいと思えます。

「売春をすすめる」エイズ予防のポスターにも腹が立ちました。あのポスタ

ーが、堂々と駅などに貼られる社会で「女の人権と性」という視点をどうしたら広められるか……気の遠くなる思いです。それでもやはり、今年も「女の人権と性」や「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康/権利）」にしつこくこだわっていきたいと思います。

(芦野由利子)

◆湾岸戦争に始まって、ソ連邦解体と独立国家共同体の成立。世界は昨年も激動の一年でした。そして、金学順さんらの勇気ある提訴で日本の恥すべき戦争責任と、戦後補償問題がつきつけられた年でもありました。

四月の統一地方選では、皆様の暖かいご支援をいただきながら再選ならず、私の力量不足を痛感した一年でもありました。今年は、自由な立場で、発言し、子どもたちの未来を少しでも明るいものにしてやりたいと思っております。

(大貫淑子)

◆激動の世紀末から二十一世紀を展望

するキーワードは「地球」と「人権」です。この地球をあらゆる破壊から守り、人権を世界に、とりわけ日本に確立するために、今年もささやかな努力をしたいと思っています。

(中島通子)

◆昨年は美浜原発の事故故があつていろいろ勉強させられました。私たちが反原発の運動をやりながらいかに原発の恐ろしさを知らないかを痛感させられました。今年も反原発を中心に平和と生命を大切にすることをやっていきたいと思っています。

(串田文子)

◆日本の教育は、昨年も風の子学園事件や豊中のいじめ事件に象徴されるように、あいかわらず『命を削る』状況です。世界の子どもの現実を「子どもの権利条約」の精神にのっとって変えていくこと、個人的には思春期を迎えて困難さの固まりのような娘を見守り、支えていくことができるかどうかを試される年になりそうです。

(清野初美)

編集後記

◆囑託殺人の記事は、うっかりすると見落とすほど小さく扱われていた。ひとりの人間の命の重みとは、そのまわりの人たちだけにしか感じられないものなのだろうか。

この頃のように佐川急便事件やオリンピックが紙面をにぎわすと、きっとどこかで今日も起きているかもしれない同様の事件は、記事にすらならない。M子さん一家の惨劇を、社会の問題としてとらえる視点をもつことは、メダルの数を数えることより数百倍も価値のあることだと思う。なぜなら巨額の賄賂にも、手厚い福祉にも縁のない大多数の善良な市民にとっては、「あすはわが身」の出来事だから。ひとりでも多くの人がこの裁判のなりゆきを見守ってほしいと切に願う。(つ)

◆名古屋の「ウイン女性企画」で今回は担当させていただきました。原稿があふれすぎてしまい割愛に悩みました。

斎藤千代さんは、海を渡って戦争といのちの尊厳の問題を提起され、私たちは、地域で起ったいたましい事件から「いのち」の問題を考えていくことにしました。〈スペース・ウイン〉では毎週火曜日の午後は、全国各地からの新しい友人を迎えています。名古屋の中心地〈栄〉にあります。

☎052・251・9064

ウイン女性企画

☆☆☆アジア女性会議・本会議の申込み受付開始！

テーマ “創りだそう女たちのアジアを”

日時・場所 92年4月2日(木)～4日(土)二泊三日 国立婦人教育会館

*全日程参加できる方(部分参加不可) *参加費 15,000円

*2月1日より先着順に受付、定員300名。

事務局☎270 千葉県松戸市常盤平西窪町22-17

☎0473-88-8899(船橋) ☎0473-86-4502(伊藤) 詳細はお電話で。

へあごらは、ギリシャ語でへ人と人との出会うひろばの意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうひろば。さくのないへひろばです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう。

と、一九七二年以来、資料誌『あごら』(年一回刊)を、また一九七七年からは『月刊あごら』を発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにはしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、どしどしお寄せください。

全国各地のへあごら拠点にもお出かけください。

●へあごらは、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②『月刊あごら』および『特集あごら』の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行(BOC)の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室(英語教室、再就職準備講座など)の運営、その他。

●会費は月額六百元(年額七千二百円)、前納制。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局(TEL 03-3354-3941)へ

あごら 172号 1992年 3月10日 発行

●編集 あごら名古屋・ウィン女性企画

●発行所 BOC出版部 〒160東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-3354-3941 ●振替東京0-5264

●発行人 くあごら企画会議 定価 515円(500円+税15円)

